天守物語

泉鏡花

時　不詳。ただし封建時代——晩秋。日没前より深更にいたる。

所　播州姫路。白鷺城の天守、第五重。

登場人物

天守夫人、富姫。（打見は二十七八）岩代国猪苗代、亀の城、亀姫。（二十ばかり）姫川図書之助。（わかき鷹匠）小田原修理。山隅九平。（ともに姫路城主武田播磨守家臣）十文字ヶ原、朱の盤坊。茅野ヶ原の舌長姥。（ともに亀姫の眷属）近江之丞桃六。（工人）桔梗。萩。葛。女郎花。撫子。（いずれも

富姫の侍女）薄。（おなじく奥女中）女の童、
禿、五人。武士、討手、大勢。

舞台。天守の五重。左右に柱、向って三方を廻廊下（まわりろうか）のごとく余して、一面に高く高麗（こうらい）べりの畳を敷く。紅（くれない）の鼓の緒、処々に蝶結びして一条（ひとすじ）、これを欄干のごとく取りまわして柱に渡す。おなじ鼓の緒のひかえづなにて、向って右、廻廊の奥に階子（はしご）を設く。階子は天井に高く通ず。左の方（かた）廻廊の奥に、また階子の上下の口あり。奥の正面、及び右なる廻廊の半ばより厚き壁にて、広き矢狭間（やざま）、狭間（はざま）を設く。外面は山岳の遠見（とおみ）、秋の雲。壁に出入りの扉あり。鼓の緒の欄干外（そと）、左の一方、棟甍（むながわら）、並びに樹立（こだち）の梢（こずえ）を見す。正面おなじく

森々(しんしん)たる樹木の梢。

女童(めのわらわ)三人――合唱――

ここはどこの細道じゃ、細道じゃ、

天神様の細道じゃ、細道じゃ。

――うたいつつ幕開(あ)く――

侍女五人。桔梗(ききょう)、女郎花(おみなえし)、萩(はぎ)、葛(くず)、撫子(なでしこ)。各名(おのおの)にそぐえる姿、鼓の緒の欄干に、あるいは立ち、あるいは坐(い)て、手に手に五色(ごしき)の絹糸を巻きたる糸枠に、金色銀色(きんしょく)の細き棹(さお)を通し、糸を松杉の高き梢を潜(くぐ)らして、釣(つり)の姿す。

女童三人は、緋(ひ)のきつけ、唄いつづく。――冴(さ)え

て且つ寂しき声。

少し通して下さんせ、下さんせ。

ごようのないもな通しません、通しません。

天神様へ願掛けに、願掛けに。

通らんせ、通らんせ。

唄いつつその遊戯をす。

薄（すすき）、天守の壁の裡（うち）より出づ。壁の一劃（かく）はあたかも扉のごとく、自由に開く、この婦（おんな）やや年かさ。鼈甲（べっこう）の突通し、御殿奥女中のこしらえ。

薄　鬼灯（ほおずき）さん、蜻蛉（とんぼ）さん。

女童一　ああい。

薄　静（しずか）になさいよ、お掃除が済んだばかりだから。

女童二　あの、釣を見ましょうね。

女童三　そうね。

いたいけに頷（うなず）きあいつつ、侍女等の中に、はらはらと袖を交（まじ）う。

薄　（四辺（あたり）を眴（みまわ）す）これは、まあ、まことに、いい見晴しでございますね。

葛　あの、猪苗代（いなわしろ）のお姫様がお遊びにおいでででございますから。

桔梗　お鬱陶（うっと）しかろうと思いまして。それには、申分のございませんお日和でございますし、遠山はもう、

もみじいたしましたから。

女郎花　矢狭間も、物見も、お目触りな、泥や、鉄の、重くるしい、外囲(そとがこい)は、ちょっと取払っておきました。

薄　成程、成程、よくおなまけ遊ばす方たちにしては、感心にお気のつきましたことでございます。

桔梗　あれ、人ぎきの悪いことを。――いつ私たちがなまけましたえ。

薄　まあ、そうお言いの口の下で、何をしておいでだろう。二階から目薬とやらではあるまいし、お天守の五重から釣をするものがありますかえ。天の川は芝を流れはいたしません。富姫様が、よそへお出掛

け遊ばして、いくら間（ひま）があると申したって、串戯（じょうだん）ではありません。

撫子　いえ、魚を釣るのではございません。

桔梗　旦那様の御前（おまえ）に、ちょうど活（い）けるのがございませんから、皆（みんな）で取って差上げようと存じまして、花を……あの、秋草を釣りますのでございますよ。

薄　花を、秋草をえ。はて、これは珍しいことを承ります。そして何かい、釣れますかえ。

女童（めのわらわ）の一人の肩に、袖でつかまって差覗（さしのぞ）く。

桔梗　ええ、釣れますとも、もっとも、新発明でございます。

薄　高慢なことをお言いでない。――が、つきましては、念のために伺いますが、お用いになります。……餌（えさ）の儀でござんすがね。

撫子　はい、それは白露でございますわ。

葛　千草八千草秋草が、それはそれは、今頃は、露を沢山（たんと）欲しがるのでございますよ。刻限も七つ時、まだ夕露も夜露もないのでございますもの。（隣を視（み）る）御覧なさいまし、女郎花さんは、もう、あんなにお釣りなさいました。

薄　ああ、ほんにねえ。まったく草花が釣れるとなれば、さて、これは静（しずか）にして拝見をいたしましょう。

釣をするのに饒舌(しゃべ)っては悪いと云うから。……一番(いっち)だまっておとなしい女郎花さんがよく釣った、争われないものじゃないかね。

女郎花　いいえ、お魚とは違いますから、声を出しても、唄いましても構いません。――ただ、風が騒ぐと下可(いけ)ませんわ。……餌の露が、ぱらぱらこぼれてしまいますから。ああ、釣れました。

薄　お見事。

　と云う時、女郎花、棹(さお)ながらくるくると枠を巻戻す、糸につれて秋草、欄干に上り来(きた)る。さきに傍(かたわら)に置きたる花とともに、女童の手に渡す。

桔梗　釣れました。（おなじく糸を巻戻す。）

萩　あれ、私も……

花につれて、黄と、白、紫の胡蝶（こちょう）の群（むれ）、ひらひらと舞上る。

葛　それそれ私も——まあ、しおらしい。

薄　桔梗さん、棹をお貸しな、私も釣ろう、まことに感心、おつだことねえ。

女郎花　お待ち遊ばせ、大層風が出て参りました、餌が糸にとまりますまい。

薄　意地の悪い、急に激しい風になったよ。

萩　ああ、内廓（うちぐるわ）の秋草が、美しい波を打ちます。

桔梗　そう云ううちに、色もかくれて、薄ばかりが真白に、水のように流れて来ました。

葛　空は黒雲が走りますよ。

薄　先刻から、野も山も、不思議に暗いと思っていた、これは酷い降りになりますね。

舞台暗くなる、電光閃く。

撫子　夫人は、どこへおいで遊ばしたのでございますえ。早くお帰り遊ばせば可うございますね。

薄　平時のように、どこへとも何ともおっしゃらないで、ふいとお出ましになったもの。

萩　お迎いにも参られませんねえ。

薄　お客様、亀姫様のおいでの時刻を、それでも御含みでいらっしゃるから、ほどなくお帰りでござんしょう。――皆さんが、御心入れの御馳走（ごちそう）、何、秋草を、早くお供えなさるが可（よ）いね。

女郎花　それこそ露の散らぬ間（ま）に。――

正面奥の中央、丸柱の傍（かたわら）に鎧櫃（よろいびつ）を据えて、上に、金色（こんじき）の眼（まなこ）、白銀（しろがね）の牙（きば）、色は藍（あい）のごとき獅子頭（ししがしら）、萌黄錦（もえぎにしき）の母衣（ほろ）、朱の渦まきたる尾を装いたるまま、荘重にこれを据えたり。

――侍女等、女童とともにその前に行（ゆ）き、跪（ひざまず）きて、手に手に秋草を花籠に挿す。色のその美しき

蝶の群、斉く飛連れてあたりに舞う。雷やや聞ゆ。
雨来る。

薄　（薄暗き中に）御覧、両眼赫耀と、牙も動くように見えること。

桔梗　花も胡蝶もお気に入って、お嬉しいんでございましょう。

時に閃電す。光の裡を、衝と流れて、胡蝶の彼処に流るる処、ほとんど天井を貫きたる高き天守の棟に通ずる階子。——侍女等、飛ぶ蝶の行方につれて、ともに其方に目を注ぐ。

女郎花　あれ、夫人がお帰りでございますよ。

はらはらとその壇の許（もと）に、振袖、詰袖、揃って手をつく。階子の上より、まず水色の衣（きぬ）の褄（つま）、裳（もすそ）を引く。すぐに蓑（みの）を被（かつ）ぎたる姿見ゆ。長（たけ）なす黒髪、片手に竹笠、半ば面（おもて）を蔽（おお）いたる、美しく気高き貴女（きじょ）、天守夫人、富姫。

夫人　（その姿に舞い縋（すが）る蝶々の三つ二つを、蓑を開いて片袖に受く）出迎えかい、御苦労だね。（蝶に云う。）

——お帰り遊ばせ、——お帰り遊ばせ——侍女等、口々に言迎う。——

夫人　時々、ふいと気まかせに、野分（のわき）のような出歩行（であるき）

きを、……

ハタと竹笠を落す。女郎花、これを受け取る。貴女の面、凄きばかり白く﨟長けたり。

露も散らさぬお前たち、花の姿に気の毒だね。（下りかかりて壇に弱腰、廊下に裳。）

薄　勿体ないことを御意遊ばす。——まあ、お前様、あんなものを召しまして。

夫人　似合ったかい。

薄　なおその上に、御前様、お痩せ遊ばしておがまれます。柳よりもお優しい、すらすらと雨の刈萱を、お被け遊ばしたようにござります。

夫人　嘘ばっかり。小山田の、案山子（かかし）に借りて来たのだものを。

薄　いいえ、それでも貴女（あなた）がめしますと、玉、白銀（しろがね）、揺（ゆるぎ）の糸の、鎧（よろい）のようにもおがまれます。

夫人　賞（ほ）められてちっと重くなった。（蓑を脱ぐ）取っておくれ。

撫子、立ち、うけて欄干にひらりと掛く。

蝶の数、その蓑に翼を憩う。……夫人、獅子頭に会釈しつつ、座に、褥（しとね）に着く。脇息（きょうそく）。

侍女たちかしずく。

少し草臥（くたび）れましたよ。……お亀様はまだお見えでは

なかったろうね。

薄　はい、お姫様（ひいさま）は、やがてお入り（い）でござりましょう。それにつけましても、お前様おかえりを、お待ち申上げました。――そしてまあ、いずれへお越し遊ばしました。

夫人　夜叉（やしゃ）ヶ池（いけ）まで参ったよ。

薄　おお、越前国大野郡（おおののごおり）、人跡絶えました山奥の。

萩　あの、夜叉ヶ池まで。

桔梗　お遊びに。

夫人　まあ、遊びと言えば遊びだけれども、大池のぬしのお雪様に、ちっと……頼みたい事があって。

薄　私はじめ、ここに居ります、誰ぞお使いをいたしますもの、御自分おいで遊ばして、何と、雨にお逢いなさいましてさ。

夫人　その雨を頼みに行きました。――今日はね、この姫路の城……ここから視れば長屋だが、……長屋の主人、それ、播磨守が、秋の野山へ鷹狩に、大勢で出掛けました。皆知っておいでだろう。空は高し、渡鳥、色鳥の鳴く音は嬉しいが、田畑と言わず駈廻って、きゃっきゃっと飛騒ぐ、知行とりども人間の大声は騒がしい。まだ、それも鷹ばかりなら我慢もする。近頃は不作法な、弓矢、鉄砲で荒立つか

ら、うるささもうるさしさ。何よりお前、私のお客、この大空の霧を渡って輿（かご）でおいでのお亀様にも、途中失礼だと思ったから、雨風と、はたた神で、鷹狩の行列を追崩す。——あの、それを、夜叉ヶ池のお雪様にお頼み申しに参ったのだよ。

薄　道理こそ時ならぬ、急な雨と存じました。

夫人　この辺（あたり）は雨だけかい。それは、ほんの吹降りの余波（なごり）であろう。鷹狩が遠出をした、姫路野の一里塚のあたりをお見な。暗夜（やみよ）のような黒い雲、眩（まばゆ）いばかりの電光（いなびかり）、可恐（おそろし）い雹（ひょう）も降りました。鷹狩の連中は、曠野（あらの）の、塚の印（しるし）の松の根に、澪（みお）に寄った鮒（ふな）の

ように、うようよ集って、あぶあぶして、あやい笠が泳ぐやら、陣羽織が流れるやら。大小をさしたものが、ちっとは雨にも濡れたが可い。慌てる紋は泡沫のよう。野袴の裾を端折って、灸のあとを出すのがある。おお、おかしい。(微笑む)粟粒を一つ二つと算えて拾う雀でも、俄雨には容子が可い。五百石、三百石、千石一人で食むものが、その笑止さと言ってはない。おかしいやら、気の毒やら、ねえ、お前。

薄　はい。

夫人　私はね、群鷺ケ峰の山の端に、掛稲を楯にして、

戻道で、そっと立って視めていた。そこには昼の月があって、雁金のように（その水色の袖を圧う）その袖に影が映った。影が、結んだ玉ずさのようにも見えた。――夜叉ヶ池のお雪様は、激しいなかにお床しい、野はその黒雲、尾上は瑠璃、皆、あの方のお計らい。それでも鷹狩の足も腰も留めさせずに、大風と大雨で、城まで追返しておくれの約束。鷹狩たちが遠くから、松を離れて、その曠野を、黒雲の走る下に、泥川のように流れてくるに従って、追手の風の横吹。私が見ていたあたりへも、一村雨颯とかかったから、歌も読まずに蓑をかりて、案山子

の笠をさして来ました。ああ、そこの蜻蛉と鬼灯たち、小児に持たして後ほどに返しましょう。

薄　何の、それには及びますまいと存じます。

夫人　いいえ、農家のものは大切だから、等閑にはなりません。

薄　その儀は畏りました。お前様、まあ、それよりも、おめしかえを遊ばしまし、おめしものが濡れまして、お気味が悪うござりましょう。

夫人　おかげで濡れはしなかった。気味の悪い事もないけれど、隔てぬ中の女同士も、お亀様に、このままでは失礼だろう。（立つ）着換えましょうか。

女郎花　ついでに、お髪（ぐし）も、夫人様（だんなさま）

夫人　ああ、あげてもらおうよ。

夫人に続いて、一同、壁の扉に隠る。女童（めのわらわ）のこりて、合唱す――

　ここはどこの細道じゃ、細道じゃ。
　天神様の細道じゃ、細道じゃ。

時に棟に通ずる件（くだん）の階子（はしご）を棟よりして入来（いりきた）る、岩代国（いわしろのくに）麻耶郡（まやごおり）猪苗代の城、千畳敷の主（ぬし）、亀姫の供頭（ともがしら）、朱の盤坊、大山伏の扮装（いでたち）、頭に犀（さい）のごとき角一つあり、眼（まなこ）円（つぶら）かに面（つら）の色朱よりも赤く、手と脚、瓜（うり）に似て青し。白布（しろぬの）にて蔽（おお）うたる一個の

小桶(こおけ)を小脇に、柱をめぐりて、内を覗(のぞ)き、女童の戯(たわむ)るるを視(み)つつ破顔して笑う

朱の盤　かちかちかちかちかち。

歯を噛鳴(かみな)らす音をさす。女童等、走り近(ちかづ)く時、面(つら)を差寄せ、大口開(あ)く。

もおう！（獣の吠(ほ)ゆる真似して威(おど)す。）

女菫一　可厭(いや)な、小父(おじ)さん。

女童二　可恐(こわ)くはありませんよ。

朱の盤　だだだだだだ。（濁れる笑(わらい)）いや、さすがは姫路お天守の、富姫御前の禿(かむろ)たち、変化心(へんげごころ)備わって、奥州第一の赭面(あかつら)に、びくともせぬは我折(がお)れ申す。—

――さて、更めて内方へ、ものも、案内を頼みましょう。

女童三　屋根から入った小父さんはえ？

朱の盤　これはまた御挨拶だ。ただ、猪苗代から参ったと、ささ、取次、取次。

女童一　知らん。

女童三　べいい。（赤べろする。）

朱の盤　これは、いかな事――（立直る。大音に）ものも案内。

薄　どうれ。（壁より出迎う）いずれから。

朱の盤　これは岩代国会津郡十文字ヶ原青五輪のあた

りに罷在る、奥州変化の先達、允殿館のあるじ朱の盤坊でござる。すなわち猪苗代の城、亀姫君の御供をいたし罷出ました。当お天守富姫様へ御取次を願いたい。

薄　お供御苦労に存じ上げます。あなた、お姫様は。

朱の盤　（真仰向けに承塵を仰ぐ）屋の棟に、すでに輿をばお控えなさるる。

薄　夫人も、お待兼ねでございます。

手を敲く。音につれて、侍女三人出づ。斉しく手をつく。

早や、御入らせ下さりませ。

朱の盤　（空へ云う）輿傍(かごわき)へ申す。此方(こなた)にもお待(まち)うけじゃ。――姫君、これへお入(い)りのよう、舌長姥(したながうば)、取次がっせえ。

階子(はしご)の上より、真先(まっさき)に、切禿(きりかむろ)の女童、うつくしき手鞠(てまり)を両袖に捧げて出づ。

亀姫、振袖、裲襠(うちがけ)、文金の高髷(たかまげ)、扇子を手にす。また女童、うしろに守刀(まもりがたな)を捧ぐ。あと圧(おさ)えに舌長姥、古びて黄ばめる練衣(ねりぎぬ)、褪(あ)せたる紅(あか)の袴(はかま)にて従い来(きた)る。

天守夫人、侍女を従え出で、設けの座に着く。

薄　（そと亀姫を仰ぐ）お姫様(ひいさま)。

出むかえたる侍女等、皆ひれ伏す。

亀姫　お許し。

しとやかに通り座につく。と、夫人と面（おもて）を合すとともに、双方よりひたと褥（しとね）の膝を寄す。

夫人　（親しげに微笑（ほほえ）む）お亀様。

亀姫　お姉様（あねえさま）、おなつかしい。

夫人　私もお可懐（なつかし）い。——

——（間。）

女郎花　夫人（おくさま）。（と長煙管（ながぎせる）にて煙草（たばこ）を捧ぐ。）

夫人　（取って吸う。そのまま吸口を姫に渡す）この頃は、めしあがるそうだね。

亀姫　ええ、どちらも。（うけて、その煙草を吸いつつ、左の手にて杯の真似をす。）

夫人　困りましたねえ。（また打笑む。）

亀姫　ほほほ、貴女を旦那様にはいたすまいし。

夫人　憎らしい口だ。よく、それで、猪苗代から、この姫路まで――道中五百里はあろうねえ、……お年寄。

舌長姥　御意にござります。……海も山もさしわたしに、風でお運び遊ばすゆえに、半日路には足りませぬが、宿々を歩いましたら、五百里……されば五百三十里、もそっともござりましょうぞ。

夫人　ああね。（亀姫に）よく、それで、手鞠をつきに、
わざわざここまでおいでだね。

亀姫　でございますから、お姉様（あねえさま）は、私がお可愛（かわゆ）うございましょう。

夫人　いいえ、お憎らしい。

亀姫　御勝手。（扇子を落す。）

夫人　やっぱりお可愛い。（その背を抱（いだ）き、見返して、姫に附添える女童に）どれ、お見せ。（手鞠を取る）まあ、綺麗な、私にも持って来て下されば可（よ）いものを。

朱の盤　ははッ。（その白布の包を出（いだ）し）姫君より、貴

女様へ、お心入れの土産がこれに。申すは、差出がましゅうござるなれど、これは格別、奥方様の思召(おぼしめ)しにかないましょう。‥何と、姫君。（色を伺う。）

亀姫　ああ、お開き。お姉様の許(とこ)だから、遠慮はない。

夫人　それはそれは、お嬉しい。が、お亀様は人が悪い、中は磐梯山(ばんだいさん)の峰の煙か、虚空蔵(こくうぞう)の人魂(ひとだま)ではないかい。

亀姫　似たもの。ほほほほほ。

夫人　要りません、そんなもの。

亀姫　上げません。

朱の盤　いやまず、（手を挙げて制す）おなかがよくて

お争い、お言葉の花が蝶のように飛びまして、お美しい事でござる。……さて、此方（こなた）より申す儀ではなけれども、奥方様、この品ばかりはお可厭（いや）ではござるまい。

包を開く、首桶（くびおけ）。中より、色白き男の生首を出し、もとどりを摑（つか）んで、ずうんと据う。

や、不重宝（ぶちょうほう）、途中揺溢（ゆりこぼ）いて、これは汁（つゆ）が出ました。（その首、血だらけ）これ、姥（うば）殿、姥殿。

舌長姥　あいあい、あいあい。

朱の盤　御進物が汚れたわ。鱗（うろこ）の落ちた鱸（すずき）の鰭（ひれ）を真水で洗う、手の悪い魚売人には似たれども、その儀

では決してない。姥殿、此方、一拭い、清めた上で進ぜまいかの。

夫人　（煙管を手に支き、面正しく屹と視て）気遣いには及びません、血だらけなは、なおおいしかろう。

舌長姥　こぼれた羹は、埃溜の汁でござるわの、お塩梅には寄りませぬ。汚穢や、見た目に、汚穢や。どれどれ掃除して参らしょうぞ。（紅の袴にて膝行り出で、桶を皺手にひしと圧え、白髪を、ざっと捌き、染めたる歯を角に開け、三尺ばかりの長き舌にて生首の顔の血をなめる）汚穢や、（ぺろぺろ）汚穢やの。（ぺろぺろ）汚穢やの、汚穢やの、ああ、甘味

やの、汚穢やの、ああ、汚穢いぞの、やれ、甘味いぞのう。

朱の盤　（慌(あわただ)しく遮る）やあ、姥(ばあ)さん、歯を当てまい、御馳走が減りはせぬか。

舌長姥　何のいの。（ぐったりと衣紋(えもん)を抜く）取る年の可恐(おそろ)しさ、近頃は歯が悪うて、人間の首や、沢庵(たくあん)の尻尾(しっぽ)はの、かくやにせねば咽喉(のど)へは通らぬ。そのままの形では、金花糖の鯛でさえ、横噛(よこかじ)りにはならぬ事よ。

朱の盤　後生らしい事を言うまい、彼岸は過ぎたぞ。――いや、奥方様、この姥が件(くだん)の舌にて舐(な)めまする

と、鳥獣(とりけもの)も人間も、とろとろと消えて骨ばかりになりますわ。……そりゃこそ、申さぬことではなかった。お土産の顔つきが、時の間(ま)に、細長うなりました。なれども、過失(あやまち)の功名、死んで変りました人相が、かえって、もとの面体(めんてい)に戻りました。……姫君も御覧ぜい。

亀姫　（扇子を顔に、透かし見る）ああ、ほんになあ。

侍女等一同、瞬きもせず熟(じっ)と視(み)る。誰も一口食べたそう。

薄　お前様――あの、皆さんも御覧なさいまし、亀姫様お持たせのこの首は、もし、この姫路の城の殿様

の顔に、よく似ているではござんせぬか。
桔梗　真に、瓜二つでございますねえ。
夫人　（打頷く）お亀様、このお土産は、これは、たしか……
亀姫　はい、私が廂を貸す、猪苗代亀ヶ城の主、武田衛門之介の首でございますよ。
夫人　まあ、貴女。（間）私のために、そんな事を。
亀姫　構いません、それに、私がいたしたとは、誰も知りはしませんもの。私が城を出ます時はね、まだこの衛門之介はお妾の膝に凭掛って、酒を飲んでおりました。お大名の癖に意地が汚くってね、鯉汁

を一口に食べますとね、魚の腸に針があって、それが、咽喉へささって、それで亡くなるのでございますから、今頃ちょうどそのお膳が出たぐらいでございますよ。（ふと驚く。扇子を落す）まあ、うっかりして、この咽喉に針がある。（もとどりを取って上ぐ）大変なことをした、お姉様に刺さったらどうしよう。

夫人　しばらく！　折角、あなたのお土産を、いま、それをお抜きだと、衛門之介も針が抜けて、蘇返ってしまいましょう。

朱の盤　いかさまな。

夫人　私が気をつけます。可うござんす。（扇子を添えて首を受取る）お前たち、瓜を二つは知れたこと、この人はね、この姫路の城の主、播磨守とは、血を分けた兄弟よ。

侍女等目と目を見合わす。

ちょっと、獅子にお供え申そう。

みずから、獅子頭の前に供う。獅子、その牙を開き、首を呑む。首、その口に隠る。

亀姫　（熟と視る）お姉様、お羨しい。

夫人　え。

亀姫　旦那様が、おいで遊ばす。

間。――夫人、姫と顔を合す、互に莞爾とす。

夫人　嘘が真に。……お互に……

亀姫　何の不足はないけれど、

夫人　こんな男が欲いねえ。――ああ、男と云えば、お亀様、あなたに見せるものがある。――桔梗さん。

桔梗　はい。

夫人　あれを、ちょっと。

桔梗　畏まりました。（立つ。）

朱の盤　（不意に）や、姥殿、獅子のお頭に見惚れまい。尾籠千万。

舌長姥　（時に、うしろ向きに乗出して、獅子頭を視

めつつあり）老人じゃ、当館奥方様も御許され。見惚れるに無理はないわいの。

朱の盤　いやさ、見惚れるに仔細はないが、姥殿、姥殿はそこに居て舌が届く。（苦笑す。）

舌長姥思わず正面にその口を蔽う。侍女等忍びやかに皆笑う。桔梗、鍬形打ったる五枚錣、金の竜頭の兜を捧げて出づ。夫人と亀姫の前に置く。

夫人　貴女、この兜はね、この城の、播磨守が、先祖代々の家の宝で、十七の奥蔵に、五枚錣に九ツの錠を下して、大切に秘蔵をしておりますのをね、今日お見えの嬉しさに、実は、貴女に上げましょうと思っ

て取出しておきました。けれども、御心入の貴女のお土産で、私のはお恥しくなりました。それだから、ただ思っただけの、申訳に、お目に掛けますばかり。

亀姫　いいえ、結構、まあ、お目覚しい。

夫人　差上げません。第一、あとで気がつきますとね、久しく蔵込んであって、かび臭い。蘭麝の薫も何にもしません。大阪城の落ちた時の、木村長門守の思切ったようなのだと可いけれど、……勝戦のうしろの方で、矢玉の雨宿をしていた、ぬくいのらしい。御覧なさい。

亀姫　（鉢金の輝く裏を返す）ほんに、討死をした兜

ではありませんね。

夫人　だから、およしなさいまし、葛や、しばらくそこへ。

指図のまま、葛、その兜を獅子頭の傍(かたえ)に置く。

お帰りまでに、きっとお気に入るものを調えて上げますよ。

亀姫　それよりか、お姉様(あねえさま)、早く、あのお約束の手鞠(てまり)を突いて遊びましょうよ。

夫人　ああ、遊びましょう。――あちらへ。――城の主人(あるじ)の鷹狩が、雨風に追われ追われて、もうやがて大手さきに帰る時分、貴女は沢山(たんと)お声がいいから、

この天守から美しい声が響くと、また立騒いでお煩（うるさ）い。

亀姫のかしずきたち、皆立ちかかる。

いや、御先達、お山伏は、女たちとここで一献（いっこん）お汲（く）みがよいよ。

朱の盤　吉祥天女、御功徳でござる。（肱（ひじ）を張って叩頭（こうとう）す。）

亀姫　ああ、姥、お前も大事ない、ここに居てお相伴をしや。——お姉様（あねえさま）に、私から我儘（わがまま）をしますから。

夫人　もっともさ。

舌長姥　もし、通草（あけび）、山ぐみ、山葡萄、手造りの猿の

酒、山蜂の蜜、蟻の甘露、諸白もござります、が、お二人様のお手鞠は、唄を聞きますばかりでも寿命の薬と承る。かように年を取りますと、慾も、得も、はは、覚えませぬ。ただもう、長生がしとうござりましてのう。

朱の盤　や、姥殿、その上のまた慾があるかい。

舌長姥　憎まれ山伏、これ、帰り途に舐められさっしゃるな。（とぺろりと舌。）

朱の盤　（頭を抱う）わあ、助けてくれ、角が縮まる。

侍女たち笑う。

舌長姥　さ、お供をいたしましょうの。

夫人を先に、亀姫、薄と女の童等、皆行く。五人
　の侍女と朱の盤あり。

桔梗　お先達、さあさあ、お寛ぎなさいまし。

朱の盤　寛がいで何とする。やあ、えいとな。

萩　もし、面白いお話を聞かして下さいましな。

朱の盤　聞かさいで何とする。（扇を笏に）それ、山伏と言っぱ山伏なり。兜巾と云っぱ兜巾なり。お腰元と言っぱ美人なり。恋路と言っぱ闇夜なり。野道山路厭いなく、修行積んだる某が、このいら高の数珠に掛け、いで一祈り祈るならば、などか利験のなかるべき。橋の下の菖蒲は、誰が植えた菖蒲ぞ、

ぼろぼん、ぼろぼんのぼろぼん。

侍女等わざとはらはらと逃ぐ、朱の盤五人を追廻す。

ぼろぼんぼろぼん、ぼろぼんぼろぼん。（やがて侍女に突かれて撞(どう)と倒る）などか利験のなかるべき。

葛　利験はござんしょうけれどな、そんな話は面白うござんせぬ。

朱の盤　（首を振って）ぼろぼん、ぼろぼん。

鞠唄聞ゆ。

——私(わし)が姉(あね)さん三人ござる、一人姉さん鼓が上手。

一人姉さん太鼓が上手。

いっちよいのが下谷（したや）にござる。
下谷一番達（だて）しゃでござる。二両で帯買うて、
三両で括（く）けて、括けめ括けめに七総（ななふさ）さげて、
折りめ折りめに、いろはと書いて。——

葛　さあ、お先達、よしの葉の、よい女郎衆ではござんせぬが、参ってお酌。（扇を開く。）

朱の盤　ぼろぼんぼろぼん。（同じく扇子にうく）おととと、ちょうどあるちょうどある。いで、お肴（さかな）を所望しよう。……などか利験のなかるべき。

桔梗　その利験ならござんしょう。女郎花さん、撫子さん、ちょっと、お立ちなさいまし。

両女(ふたり)立つ。

ここをどこぞと、もし人問わば、ここは駿河(するが)の
府中の宿よ、人に情(なさけ)を掛川の宿よ。雉子(きじ)の
雌鳥(めんどり)
ほろりと落いて、打ちきせて、しめて、しょ
のしょの
いとしよの、そぞろいとしゅうて、遣瀬(やるせ)なや。

朱の盤　やんややんや。

女郎花　今度はお先達、さあ。

葛　貴方(あなた)がお立ちなさいまし。

朱の盤　ぼろぼん、ぼろぼん。此方衆思ざしを受きようならば。

侍女五人扇子を開く、朱の盤杯を一順す。すなわち立つ。腰なる太刀をすらりと抜き、以前の兜を切先にかけて、衝と天井に翳し、高脛に拍子を踏んで——

　　戈鋋剣戟を降らすこと電光の如くなり。
　　盤石巌を飛ばすこと春の雨に相同じ。
　　然りとはいえども、天帝の身には近づかで、
　　修羅かれがために破らる。

——お立ち——、（陰より諸声。）

手早く太刀を納め、兜をもとに直す、一同つい居る。

亀姫　お姉様、今度は貴方が、私へ。

夫人　はい。

舌長姥　お早々と。

夫人　（頷きつつ、連れて廻廊にかかる。目の下遥に瞰下す）ああ、鷹狩が帰って来た。

亀姫　（ともに、瞰下す）先刻私が参る時は、蟻のような行列が、その鉄砲で、松並木を走っていました。ああ、首に似た殿様が、馬に乗って反返って、威張って、本丸へ入って来ますね。

夫人　播磨守さ。

亀姫　まあ、翼の、白い羽の雪のような、いい鷹を持っているよ。

夫人　おお。（軽く胸を打つ）貴女。（間）あの鷹を取って上げましょうね。

亀姫　まあ、どうしてあれを。

夫人　見ておいで、、それは姫路の、富だもの。

蓑を取って肩に装う、美しき胡蝶の群、ひとしく蓑に舞う。颯と翼を開く風情す。

それ、人間の目には、羽衣を被た鶴に見える。

ひらりと落す特、一羽の白鷹颯と飛んで天守に上

るを、手に捕う。

――わっと云う声、地より響く――

亀姫　お涼しい、お姉様(あねえさま)。

夫人　この鷹ならば、鞠を投げてもとりましょう。――沢山(たんと)お遊びなさいまし。

亀姫　あい。（嬉しげに袖に抱(いだ)く。そのまま、真先(まっさき)に階子(はしご)を上る。二三段、と振返りて、衝(つ)と鷹を雪の手に据うるや否や）虫が来た。

云うとともに、袖を払って一筋の征矢(そや)をカラリと落す。矢は鷹狩の中(うち)より射掛けたるなり。

夫人　（斉(ひと)しくともに）む。（と肩をかわし、身を捻(ひね)っ

て背向（そがい）になる、舞台に面（おもて）を返す時、口に一条（ひとすじ）の征矢、手にまた一条の矢を取る。下より射たるを受けたるなり）推参な。

――たちまち鉄砲の音、あまたたび――

薄　それ、皆さん。

侍女等、身を垣にす。

朱の盤　姥殿、確（しっか）り。（姫を庇（かば）うて大手を開く。）

亀姫　大事ない、大事ない。

夫人　（打笑む）ほほほ、皆が花火線香をお焚（た）き――そうすると、鉄砲の火で、この天守が燃えると思って、吃驚（びっくり）して打たなくなるから。

——舞台やや暗し。鉄砲の音止(や)む——

夫人、亀姫と声を合せて笑う、ほほほほほ。

夫人　それ、御覧、ついでにその火で、焼けそうな処を二三処(ケしょ)焚(や)くが可(い)い、お亀様の路(みち)の松明(たいまつ)にしようから。

舞台暗し。

亀姫　お心づくしお嬉しや。さらば。

夫人　さらばや。

寂寞(せきばく)、やがて燈火(ともしび)の影に、うつくしき夫人の姿。舞台にただ一人のみ見ゆ。夫人うしろむきにて、獅子頭に対し、机に向い巻ものを読みつつあり。

間（ま）を置き、女郎花、清らかなる小掻巻（こがいまき）を持ち出で、静（しずか）に夫人の背（せな）に置き、手をつかえて、のち去る。

ここはどこの細道じゃ、細道じゃ。
天神様の細道じゃ、細道じゃ。

舞台一方の片隅に、下の四重に通ずべき階子（はしご）の口あり。その口より、まず一（ひとつ）の雪洞（ぼんぼり）顕（あらわ）れ、一廻りあたりを照す。やがて衝（つ）と翳（かざ）すとともに、美丈夫、秀でたる眉に勇壮の気満つ。黒羽二重の紋着（もんつき）、萌黄（もえぎ）の袴（はかま）、臘鞘（ろざや）の大小にて、姫川図書之助（ずしょのすけ）登場。唄をききつつ低徊（ていかい）し、天井を仰ぎ、廻廊を窺（うかが）い、

やがて燈の影を視て、やや驚く。ついで几帳を認む。彼が入るべき方に几帳を立つ。図書は躊躇の後決然として進む。瞳を定めて、夫人の姿を認む。剣夾に手を掛け、気構えたるが、じりじりと退る。

夫人　（間）誰。

図書　はっ。（と思わず膝を支く）某。

夫人　（面のみ振向く、――無言。）

図書　私は、当城の大守に仕うる、武士の一人でございます。

夫人　何しに見えた。

図書　百年以来、二重三重までは格別、当お天守五重までは、生（しょう）あるものの参った例（ためし）はありませぬ。今宵、大殿の仰せに依って、私（わたくし）、見届けに参りました。

夫人　それだけの事か。

図書　且つまた、大殿様、御秘蔵の、日本一の鷹がそれまして、お天守のこのあたりへ隠れました。行方を求めよとの御意でございます。

夫人　翼あるものは、人間ほど不自由ではない。千里、五百里、勝手な処へ飛ぶ、とお言いなさるが可（よ）い。

――用はそれだけか。

図書　別に余の儀は承りませぬ。
夫人　五重に参って、見届けた上、いかが計らえとも
言われなかったか。
図書　いや、承りませぬ。
夫人　そして、お前も、こう見届けた上に、どうしようとも思いませぬか。
図書　お天守は、殿様のものでございます。いかなる事がありましょうとも、私（わたくし）一存にて、何と計らおうとも決して存じませぬ。
夫人　お待ち。この天守は私のものだよ。
図書　それは、貴方（あなた）のものかも知れませぬ。また殿様

は殿様で、御自分のものだと御意遊ばすかも知れませぬ。しかし、いずれにいたせ、私(わたくし)のものでないことは確(たしか)でございます。自分のものでないものを、殿様の仰せも待たずに、どうしようとも思いませぬ。

夫人　すずしい言葉だね、その心なれば、ここを無事で帰られよう。私も無事に帰してあげます。

図書　冥加(みょうが)に存じます。

夫人　今度は、播磨が申しきけても、決して来てはなりません。ここは人間の来る処ではないのだから。——また誰も参らぬように。

図書　いや、私(わたくし)が参らぬ以上は、五十万石の御家中、

誰一人参りますものはございますまい。皆生命（いのち）が大切でございますから。

夫人　お前は、そして、生命は欲しゅうなかったのか。

図書　私（わたくし）は、仔細（しさい）あって、殿様の御不興を受け、お目通（めどおり）を遠ざけられ閉門の処、誰もお天守へ上（あが）りますものがないために、急にお呼出しでございました。その御上使は、実は私（わたくし）に切腹仰せつけの処を、急に御模様がえになったのでございます。

夫人　では、この役目が済めば、切腹は許されますか。

図書　そのお約束でございました。

夫人　人の生死（いきしに）は構いませんが、切腹はさしたくない。

私は武士の切腹は嫌いだから。しかし、思い掛なく、お前の生命を助けました。……悪い事ではない。今夜はいい夜だ。それではお帰り。

図書　姫君。

夫人　まだ、居ますか。

図書　は、恐入ったる次第ではございますが、御姿を見ました事を、主人に申まして差支えはございませんか。

夫人　確にお言いなさいまし。留守でなければ、いつでも居るから。

図書　武士の面目に存じます――御免。

雪洞（ぼんぼり）を取って静（しずか）に退座す。夫人長煙管（ながぎせる）を取って、払（はた）く音に、図書板敷にて一度留（とど）まり、直ちに階子（はしご）の口にて、燈（ともしび）を下に、壇に隠る。

鐘の音。

時に一体の大入道、面（つら）も法衣（ころも）も真黒（まっくろ）なるが、もの陰より甍（いらか）を渡り梢（こずえ）を伝うがごとくにして、舞台の片隅を伝い行（ゆ）き、花道なる切穴の口に踞（うずく）まる。

鐘の音。

図書、その切穴より立顕（たちあらわ）る。

夫人すっと座を立ち、正面、鼓の緒の欄干に立ち熟（じっ）と視（み）る時、図書、雪洞を翳（かざ）して高く天守を見返

す、トタンに大入道さし覗きざまに雪洞をふっと消す。図書身構す。大入道、大手を拡げてその前途を遮る。

鐘の音。

侍女等、凜々しき扮装、揚幕より、懐剣、薙刀を構えて出づ。図書扇子を抜持ち、大入道を払い、懐剣に身を躱し、薙刀と丁と合わす。かくて一同を追込み、揚幕際に扇を揚げ、屹と天守を仰ぐ。

鐘の音。

夫人、従容として座に返る。図書、手探りつつもとの切穴を捜る。（間）その切穴に没す。しばら

くして舞台なる以前の階子の口より出づ。猶予（ためら）わず夫人に近づき、手をつく。

夫人　（先んじて声を掛く。穏（おだやか）に）また見えたか。

図書　はっ、夜陰と申し、再度御左右（おそう）を騒がせ、まことに恐入りました。

夫人　何しに来ました。

図書　御天守の三階中壇まで戻りますと、鳶（とび）ばかり大（おおき）さの、野衾（のぶすま）かと存じます、大蝙蝠（おおこうもり）の黒い翼に、燈（ともしび）を煽（あお）ぎ消されまして、いかにとも、進退度を失いましたにより、灯を頂きに参りました。

夫人　ただそれだけの事に。……二度とおいでない

と申した、私の言葉を忘れましたか。

図書　針ばかり片割月（かたわれづき）の影もささず、下に向えば真の暗黒（やみ）。男が、足を踏みはずし、壇を転がり落ちまして、不具（かたわ）になどなりましては、生効（いきがい）もないと存じます。上を見れば五重のここより、幽（かすか）にお燈（あかり）がさしました。お咎（とが）めをもって生命をめさりょうとも、男といたし、階子から落ちて怪我（けが）をするよりはと存じ、御戒（おんいましめ）をも憚（はばか）らず推参いたしてございます。

夫人　（莞爾（にっこり）と笑む）ああ、爽（さわや）かなお心、そして、貴方はお勇（いさま）しい。燈（あかり）を点（つ）けて上げましょうね。（座を寄す。）

図書　いや、お手ずからは恐多い。私が。

夫人　いえいえ、この燈は、明星、北斗星、竜の燈、玉の光もおなじこと、お前の手では、蠟燭には点きません。

図書　ははッ。（瞳を凝す。）

夫人、世話めかしく、雪洞の蠟を抜き、短檠の灯を移す。燭をとって、熟と図書の面を視る、恍惚とす。

夫人　（蠟燭を手にしたるまま）帰したくなくなった、もう帰すまいと私は思う。

図書　ええ。

夫人　貴方は、播磨が貴方に、切腹を申しつけたと言いました。それは何の罪でございます。

図書　私（わたくし）が拳（こぶし）に据えました、殿様が日本一とて御秘蔵の、白い鷹を、このお天守へ逸（そら）しました、その越度（おちど）、その罪過でございます。

夫人　何、鷹をそらした、その越度、その罪過、ああ人間というものは不思議な咎（とが）を被（おお）せるものだね。その鷹は貴方が勝手に鳥に合せたのではありますまい。天守の棟に、世にも美しい鳥を視（み）て、それが欲しさに、播磨守が、自分で貴方にいいつけて、勝手に自分でそらしたものを、貴方の罪にしますのかい。

図書　主（しゅう）と家来でございます。仰せのまま生命（いのち）をさし出しますのが臣たる道でございます。

夫人　その道は曲っていましょう。間違ったいいつけに従うのは、主人に間違った道を踏ませるのではありませんか。

図書　けれども、鷹がそれました。

夫人　ああ、主従とかは可恐（おそろ）しい。鷹とあの人間の生命（いのち）とを取（とり）かえるのでございますか。よしそれも、貴方が、貴方の過失（あやまち）なら、君と臣というもののそれが道なら仕方がない。けれども、播磨がさしずなら、それは播磨の過失というもの。第一、鷹を失ったの

は、貴方ではありません。あれは私が取りました。

図書　やあ、貴方が。

夫人　まことに。

図書　ええ、お怨み申上ぐる。（刀に手を掛く。）

夫人　鷹は第一、誰のものだと思います。鷹には鷹の世界がある。露霜の清い林、朝嵐夕風の爽かな空があります。決して人間の持ちものではありません。諸侯なんどというものが、思上った行過ぎな、あの、鷹を、ただ一人じめに自分のものと、つけ上りがしています。貴方はそうは思いませんか。

図書　（沈思す、間）美しく、気高い、そして計り知

られぬ威のある、姫君。——貴方にはお答が出来かねます。

夫人　いいえ、いいえ、かどだてて言籠(いいこ)めるのではありません。私の申すことが、少しなりともお分りになりましたら、あのその筋道の分らない二三の丸、本丸、太閤丸(たいこうまる)、廓内(くるわうち)、御家中の世間へなど、もうお帰りなさいますな。白銀(しろがね)、黄金(こがね)、球、珊瑚(さんご)、千石万石の知行より、私が身を捧げます。腹を切らせる殿様のかわりに、私の心を差上げます、私の生命(いのち)を上げましょう。貴方お帰りなさいますな。

図書　迷いました、姫君。殿に金鉄の我が心も、波打

つばかり悩乱をいたします。が、決心が出来ません。私（わたくし）は親にも聞きたし、師にも教えられたし、書もつにも聞かねばなりません。お暇（いとま）を申上げます。

夫人　（歎息す）ああ、まだ貴方は、世の中に未練がある。それではお帰りなさいまし。（この時蠟燭を雪洞に）はい。

図書　途方に暮れつつ参ります。迷（まよい）の多い人間を、あわれとばかり思召せ。

夫人　ああ、優しいそのお言葉で、なお帰したくなくなった。（袂（たもと）を取る。）

図書　（屹（きっ）として袖を払う）強いて、たって、お帰し

なくば、お抵抗(てむかい)をいたします。

夫人　（微笑(ほほえ)み）あの私に。

図書　おんでもない事。

夫人　まあ、お勇ましい、凛々(りり)しい。あの、獅子に似た若いお方、お名が聞きたい。

図書　夢のような仰せなれば、名のありなしも覚えませぬが、姫川図書之助と申します。

夫人　可懐(なつかし)い、嬉しいお名、忘れません。

図書　以後、お天守下(した)の往(ゆき)かいには、誓って礼拝をいたします。——御免。（衝(つっ)と立つ。）

夫人　ああ、図書様、しばらく。

図書　是非もない、所詮活けてはお帰しない掟なのでございますか。

夫人　ほほほ、播磨守の家中とは違います。ここは私の心一つ、掟なぞは何にもない。

図書　それを、お呼留め遊ばしたは。

夫人　おはなむけがあるのでござんす。——人間は疑深い。卑怯な、臆病な、我儘な、殿様などはなおの事。貴方がこの五重へ上って、この私を認めたことを誰もほんとうにはせぬであろう。清い、爽かな貴方のために、記念の品をあげましょう。（静に以前の兜を取る）——これを、その記念にお持ちなさい

まし。

図書　存じも寄らぬ御(おん)たまもの、姫君に向い、御辞退はかえって失礼。余り尊い、天晴(あっぱれ)な御兜(おんかぶと)。

夫人　金銀は堆(うずたか)けれど、そんなにいい細工ではありません。しかし、武田には大切な道具。——貴方、見覚えがありますか。

図書　（疑(うたがい)の目を凝(こら)しつつあり）まさかとは存ずるなり、私(わたくし)とても年に一度、虫干の外には拝しませぬが、ようも似ました、お家の重宝(ちょうほう)、青竜の御兜。

夫人　まったく、それに違いありません。

図書　（愕然(がくぜん)とす。急に）これにこそ足の爪立(つまだ)つばか

り、心急ぎがいたします、御暇（おいとま）を申うけます。

夫人　今度来ると帰しません。

図書　誓って、――仰せまでもありません。

夫人　さらば。

図書　はっ。（兜を捧げ、やや急いで階子（はしご）に隠る。）

夫人　（ひとりもの思い、机に頬杖（ほおづえ）つき、獅子にもの言う）貴方、あの方を――私（わたくし）に下さいまし。

薄　（静に出づ）お前様。

夫人　薄か。

薄　立派な方でございます。

夫人　今まで、あの人を知らなかった、目の及ばなかっ

た私は恥かしいよ。

薄　かねてのお望みに叶(かの)うた方を、何でお帰しなさいました。

夫人　生命(いのち)が欲(ほし)い。抵抗(てむかい)をすると云うもの。

薄　御一所に、ここにお置き遊ばすまで、何の、生命(いのち)をお取り遊ばすのではございませんのに。

夫人　あの人たちの目から見ると、ここに居るのは活(い)きたものではないのだと思います。

薄　それでは、貴方の御容色(ごきりょう)と、そのお力で、無理にもお引留めが可(よ)うございますのに。何の、抵抗(てむかい)をしました処で。

夫人　いや、容色（きりょう）はこちらからは見せたくない。力で、人を強いるのは、播磨守なんぞの事、真（まこと）の恋は、心と心、……（軽く）薄や。

薄　は。

夫人　しかし、そうは云うものの、白鷹を据えた、鷹匠（たかじょう）だと申すよ。——縁だねえ。

薄　きっと御縁がござりますよ。

夫人　私もどうやら、そう思うよ。

薄　奥様、いくら貴女のお言葉でも、これはちと痛入（いたみい）りました。

夫人　私も痛入りました。

薄　これはまた御挨拶でござります——あれ、何やら、御天守下が騒がしい。（立って欄干に出づ、遥に下を覗込む）……まあ、御覧なさいまし。

夫人　（座のまま）何だえ。

薄　武士が大勢で、篝を焚いております。ああ、武田播磨守殿、御出張、床几に掛ってお控えだ。おぬるくて、のろい癖に、もの見高な、せっかちで、お天守見届けのお使いの帰るのを待兼ねて、推出したのでござります。もしえもしえ、図書様のお姿が小さく見えます。奥様、おたまじゃくしの真中で、御紋着の御紋も河骨、すっきり花が咲いたような、

水際立ってお美しい。……奥様。

夫人　知らないよ。

薄　おお、兜あらためがはじまりました。おや、吃驚（びっくり）した。あの、殿様の漆みたいな太い眉毛が、びくびくと動きますこと。先刻（さっき）の亀姫様のお土産の、兄弟の、あの首を見せたら、どうでございましょう。ああ、御家老が居ます。あの親仁（おやじ）も大分百姓を痛めて溜込（ためこ）みましたね。そのかわり頭が兀（は）げた。まあ、皆（みんな）が図書様を取巻いて、お手柄にあやかるのかしら。おや、追取刀（おっとりがたな）だ。何、何、何、まあ、まあ、奥様々々。

夫人　もう可い。

薄　ええ、もう可いではございません。図書様を賊だ、と言います。御秘蔵の兜を盗んだ謀逆人（むほんにん）、謀逆人、殿様のお首に手を掛けたも同然な逆賊でございますとさ。お庇（かげ）で兜が戻ったのに。――何てまあ、人間というものは。――あれ、捕手（とりて）が掛（かか）った。忠義と知行で、てむかいはなさらぬかしら。しめた、投げた、嬉しい。そこだ。御家老が肩衣（かたぎぬ）を撥（はね）ましたよ。大勢が抜連れた。あれ危い。豪（えら）い。図書様抜合せた。……一人腕が落ちた。あら、胴切（どうぎり）。また何も働かずとも可いことを、五両二人扶持（ににんぶち）らしいのが、あら、可哀相（かわいそう）に、首が飛びます。

夫人　秀吉時分から、見馴(みな)れていながら、何だねえ、騒々しい。

薄　騒がずにはいられません。多勢に一人、あら切抜けた、図書様がお天守に遁込(にげこ)みました。追掛けますよ。槍(やり)まで持出した。（欄干をするすると）図書様が、二重へ駈上(かけあが)っておいでなさいます。大勢が追詰めて。

夫人　（片膝立つ）可(よ)し、お手伝い申せ。

薄　お腰元衆、お腰元衆。――（呼びつつ忙(せわ)しく階子(はしご)を下り行く。）

夫人、片手を掛けつつ几帳越に階子の方を瞰下(みおろ)す。

――や、や、や、――激しき人声、もの音、足蹈(あしぶみ)。

――
図書、もとどりを放ち、衣服に血を浴ぶ。刀を振(ふる)って階子の口に、一度屹(きっ)と下を見込む。肩に波打ち、はっと息して撞(どう)となる。

夫人　図書様。

図書　（心づき、蹌踉(よろよろ)と、且つ呼吸(いき)せいて急いで寄る）姫君、お言葉をも顧みず、三度の推参をお許し下さい。私(わたくし)を賊……賊……謀逆人(むほんにん)、逆賊と申して。

夫人　よく存じておりますよ。昨日今日、今までも、お互に友と呼んだ人たちが、いかに殿の仰せとて、手の裏を反(かえ)すように、ようまあ、あなたに刃(やいば)を向け

ます。

図書　はい、微塵(みじん)も知らない罪のために、人間同志に殺されましては、おなじ人間、断念(あきら)められない。貴女(あなた)のお手に掛(かか)ります。——御禁制(ごきんぜい)を破りました、御約束を背きました、その罪に伏します。速(すみやか)に生命(いのち)をお取り下されたい。

夫人　ええ、武士(さむらい)たちの夥間(なかま)ならば、貴方のお生命を取りましょう。私と一所には、いつまでもお活きなさいまし。

図書　(急(せ)きつつ)お情(なさけ)余る、お言葉ながら、活きようとて、討手の奴儕(やつばら)、決して活かしておきません。

早くお手に掛け下さいまし。貴女に生命を取られれば、もうこの上のない本望、彼等に討たるるのは口惜い。（夫人の膝に手を掛く）さ、生命を、生命を——こう云う中にも取詰めて参ります。

夫人　いいえ、ここまでは来ますまい。

図書　五重の、その壇、その階子を、鼠のごとく、上りつ下りついたしおる。……かねての風説、鬼神より、魔よりも、ここを恐しと存じておるゆえ、いささか躊躇はいたしますが、既に、私の、かく参ったを、認めております。こう云う中にも、たった今。

夫人　ああ、それもそう、何より前に、貴方をおかく

まい申しておこう。（獅子頭を取る、母衣（ほろ）を開いて、図書の上に蔽（おお）いながら）この中へ……この中へ――

図書　や、金城鉄壁。

夫人　いいえ、柔い。

図書　仰（おおせ）の通り、真綿よりも。

夫人　そして、確（しっ）かり、私におつかまりなさいまし。

図書　失礼御免。

夫人の背（せな）よりその袖に縋（すが）る。縋る、と見えて、身体（からだ）その母衣の裾（すそ）なる方（かた）にかくる。獅子頭を捧げつつ、夫人の面（おもて）、なお母衣の外に見ゆ。

討手どやどやと入込（いりこ）み、と見てわっと一度退く時、

夫人も母衣に隠る。ただ一頭青面の獅子猛然として舞台にあり。

討手。小田原修理(しゅり)、山隅九平(くへい)、その他。抜身(ぬきみ)の槍(やり)、刀。中には仰山に小具足をつけたるもあり。大勢。

九平　（雪洞(ぼんぼり)を寄す）やあ、怪(あや)しく、凄(すご)く、美しい、婦(おんな)の立姿と見えたはこれだ。

修理　化(ばけ)るわ化るわ。御城の瑞兆(ずいちょう)、天人のごとき鶴を御覧あって、殿様、鷹を合せたまえば、鷹はそれて破蓑(やれみの)を投落す、……言語道断。

九平　他(ほか)にない、姫川図書め、死(しに)ものぐるいに、確にそれなる獅子母衣に潜ったに相違なし。やあ、上意

だ、逆賊出合え（いであ）。山隅九平向うたり。

修理　待て、山隅、先方で潜った奴（やつ）だ。呼んだって出やしない。取って押え、引摺出（ひきずりだ）せ。

九平　それ、面々。

修理　気を着けい、うかつにかかると怪我をいたす。元来この青獅子（あおじし）が、並大抵のものではないのだ。伝え聞く。な、以前これは御城下はずれ、群鷺山（むらさぎやま）の地主神（じしゅじん）の宮に飾ってあった。二代以前の当城殿様、お鷹狩の馬上から——一人町里（まちさと）には思いも寄らぬ、都方（みやこがた）と見えて、世にも艶麗（あでやか）な女の、一行を颯（さっ）と避けて、その宮へかくれたのを——とろんこの目で御覧（ごろう）

じたわ。此方（こなた）は鷹狩、もみじ山だが、いずれ戦（いくさ）に負けた国の、上臈（じょうろう）、貴女、貴夫人たちの落人（おちうど）だろう。絶世の美女だ。しゃつ摑出（つかみいだ）いて奉れ、とある。御近習、宮の中へ闖入（ちんにゅう）し、人妻なればと、いなむを捕えて、手取足取しようとしたれば、舌を噛（か）んで真俯向（まうつむ）けに倒れて死んだ。その時にな、この獅子頭を熟（じっ）と視（み）て、あわれ獅子や、名誉の作かな。わらわにかばかりの力あらば、虎狼（とらおおかみ）の手にかかりはせじ、と吐（ほざ）いた、とな。続いて三年、毎年、秋の大洪水よ。何が、死骸（しがい）取片づけの山神主が見た、と申すには、獅子が頭（かしら）を逆（さかしま）にして、その婦（おんな）の血を舐（な）め舐め、

目から涙を流いたというが触出（ふれだ）してでな。打続く洪水は、その婦（おんな）の怨（うらみ）だと、国中の是沙汰（これざた）だ。婦（おんな）が前髪にさしたのが、死ぬ時、髪をこぼれ落ちたというを拾って来て、近習が復命をした、白木に刻んだ三輪牡丹高彫（ぼたんたかぼり）のさし櫛（ぐし）をな、その時の馬上の殿様は、澄（すま）して袂（たもと）へお入れなさった。祟（たたり）を恐れぬ荒気の大名。おもしろい、水を出さば、天守の五重を浸（ひた）して見よ、とそれ、生捉（いけど）って来てな、ここへ打上げたその獅子頭だ。以来、奇異妖変（ようへん）さながら魔所のように沙汰する天守、まさかとは思うたが、目（ま）のあたり不思議を見るわ。――心してかかれ。

九平　心得た、槍をつけろ。

討手、槍にて立ちかかる。獅子狂う。討手辟易す。修理、九平等、抜連れ抜連れ一同立掛る。獅子狂う。また辟易す。

修理　木彫にも精がある。活きた獣も同じ事だ。目を狙え、目を狙え。

九平、修理、力を合せて、一刀ずつ目を傷く、獅子伏す。討手その頭をおさう。

図書　（母衣を撥退け刀を揮って出づ。口々に罵る討手と、一刀合すと斉しく）ああ、目が見えない。（押倒され、取って伏せらる）無念。

夫人　（獅子の頭をあげつつ、すっくと立つ。黒髪乱れて面凄し。手に以前の生首の、もとどりを取って提ぐ）誰の首だ、お前たち、目のあるものは、よっく見よ。（どっしと投ぐ。）

――討手わッと退き、修理、恐る恐るこれを拾う。

修理　南無三宝。

九平　殿様の首だ。播磨守様御首だ。

修理　一大事とも言いようなし。御同役、お互に首はあるか。

九平　可恐い魔ものだ。うかうかして、こんな処に居べきでない。

討手一同、立つ足もなく、生首をかこいつつ、乱れて退く。

図書　姫君、どこにおいでなさいます。姫君。

夫人、悄然として、立ちたるまま、もの言わず。

図書　（あわれに寂しく手探り）姫君、どこにおいでなさいます。　私は目が見えなくなりました。姫君。

夫人　（忍び泣きに泣く）貴方、私も目が見えなくなりました。

図書　ええ。

夫人　侍女たち、侍女たち。――せめては燈を――
――皆、盲目になりました。誰も目が見えません

のでございます。――（口々に一同はっと泣く声、
壁の彼方（かなた）に聞ゆ。）

夫人（獅子頭とともにハタと崩折（くずお）る）獅子が両眼を傷つけられました。この精霊（しょうりょう）で活きましたものは、一人も見えなくなりました。図書様、……どこに。

図書　姫君、どこに。

さぐり寄りつつ、やがて手を触れ、はっと泣き、相抱（あいいだ）く。

夫人　何と申そうようもない。貴方お覚悟をなさいまし。今持たせてやった首も、天守を出れば消えましょう。討手は直ぐに引返して参ります。私一人は、

雲に乗ります、風に飛びます、虹（にじ）の橋も渡ります。図書様には出来ません。ああ口惜（くやし）い。あれら討手のものの目に、蓑笠着ても天人の二人揃った姿を見せて、日の出、月の出、夕日影にも、おがませようと思ったのに、私の方が盲目になっては、ただお生命（いのち）さえ助けられない。堪忍して下さいまし。

図書　くやみません！　姫君、あなたのお手に掛けて下さい。

夫人　ええ、人手には掛けますまい。そのかわり私も生きてはおりません、お天守の塵（ちり）、煤（すす）ともなれ、落葉になって朽ちましょう。

図書　やあ、何のために貴女が、美しい姫の、この世にながらえておわすを土産に、冥土（めいど）へ行（ゆ）くのでございます。

夫人　いいえ、私も本望でございます、貴方のお手にかかるのが。

図書　真実のお声か、姫君。

夫人　ええ何の。――そうおっしゃる、お顔が見たい、ただ一目。……千歳（ちとせ）百歳（ももとせ）にただ一度、たった一度の恋だのに。

図書　ああ、私（わたくし）も、もう一目、あの、気高い、美しいお顔が見たい。（相縋（あいすが）る。）

夫人　前世も後世も要らないが、せめてこうして居とうござんす。

図書　や、天守下で叫んでいる。

夫人　（屹となる）口惜しい、もう、せめて一時隙があれば、夜叉ヶ池のお雪様、遠い猪苗代の妹分に、手伝を頼もうものを。

図書　覚悟をしました。姫君、私を。……

夫人　私は貴方に未練がある。いいえ、助けたい未練がある。

図書　猶予をすると討手の奴、人間なかまに屠られます、貴女が手に掛けて下さらずば、自分、我が手で。

――（一刀を取直す。）

夫人　切腹はいけません。ああ、是非もない。それでは私が御介錯、舌を噛切ってあげましょう。それと一所に、胆のたばねを――この私の胸を一思いに。

図書　せめてその、ものをおっしゃる、貴方の、ほのかな、口許だけも、見えたらばな。

夫人　貴方の睫毛一筋なりと。（声を立ててともに泣く。）

奥なる柱の中に、大音あり。――

――待て、泣くな泣くな。――

工人、近江之丞桃六、六十じばかりの柔和なる老

人。頭巾、裁着、火打袋を腰に、扇を使うて顕る。

桃六　美しい人たち泣くな。（つかつかと寄って獅子の頭を撫で）まず、目をあけて進ぜよう。

火打袋より一挺の鑿を抜き、双の獅子の眼に当つ。

――夫人、図書とともに、あっと云う――

桃六　どうだ、の、それ、見えよう。はははは、ちゃんと開いた。嬉しそうに開いた。おお、もう笑うか。誰がよ誰がよ、あっはっはっ。

夫人　お爺様。

図書　御老人、あなたは。

桃六　されば、誰かの櫛に牡丹も刻めば、この獅子頭

も彫った、近江之丞桃六と云う、丹波(たんば)の国の楊枝削(ようじけずり)よ。

夫人　まあ、（図書と身を寄せたる姿を心づぐ）こんな姿を、恥かしい。

　図書も、ともに母衣(ほろ)を被(かつ)ぎて姿を蔽(おお)う。

桃六　むむ、見える、恥しそうに見える、極(きま)りの悪そうに見える、がやっぱり嬉しそうに見える、はっはっはっはっ。睦(むつま)じいな、若いもの。（石を切って、ほくちをのぞませ、煙管(きせる)を横銜(よこぐわ)えに煙草(たばこ)を、すぱすぱ）気苦労の挙句は休め、安らかに一寝入(ねいり)さっせえ。そのうちに、もそっと、その上にも清(すずし)い目にして進ぜ

よう。
　鑿（のみ）を試む。　月影さす。
そりゃ光がさす、月の光あれ、眼玉。（鑿を試み、小耳を傾け、　鬨（とき）のごとく叫ぶ天守下の声を聞く）
世は戦（いくさ）でも、　胡蝶（ちょう）が舞う、　撫子（なでしこ）も桔梗（ききょう）も咲くぞ。――馬鹿めが。（呵々（からから）と笑う）ここに獅子がいる。お祭礼（まつり）だと思って騒げ。（鑿を当てつつ）槍、刀、弓矢、鉄砲、城の奴等（やつら）。

――幕――

大正六（一九一七）年九月

底本：「泉鏡花集成7」ちくま文庫、筑摩書房
　1995（平成7）年12月4日第1刷発行
底本の親本：「鏡花全集　第二十六巻」岩波書店
　1942（昭和17）年10月15日発行
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：門田裕志
校正：染川隆俊
2006年9月21日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。